様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　25 年　6 月　23 日現在

機関番号：　３５３０８
研究種目：基盤（Ｃ）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２５３０５９４
研究課題名（和文）　「消費されない農村」モデル構築のための理論的・実証的研究

研究課題名（英文）　The theoretical and empirical study for making models of “not consumed rural society” in modern Japan

研究代表者
つる　理恵子　（TSURU RIEKO）
吉備国際大学・社会科学部・准教授
研究者番号：20227474

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、農村が持続的で安定した生活および農村社会の維持・再生をはかるために都市との交流を行う際、いかに「消費される」ことなく自立的でありえるかを明らかにすることにあった。調査地のムラは、固有の歴史や文化を基盤とする生活意識の影響を受けながら、ムラの主体性を形成・保有していた。都市の欲望を十分に意識しつつ、ムラのキーパーソンたちの判断で交流を続けることで「消費されない農村」が可能となっていることが分かった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to highlight how people in rural society can be independent without consumed by urban when they exchange urban to maintain and revitalize their own rural society. Each fields of my fieldwork have been influenced with life consciousness which is based specific history and culture. And they have been generating and maintaining subjectivity of Mura. They are convinced with the desire for rural fully and continue to exchange to urban and rural, that makes the rural to be independent not consumed.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：社会学・社会学
キーワード：消費される農村、田舎のプロデューサー、都市の欲望、小さな経済、他者への信頼、ダウンシフト、弱さの力、文化変容

１．研究開始当初の背景

日本の多くの農山村では、高度経済成長期以降、ほぼ一貫して過疎化、高齢化、少子化が進んできた。村落研究者たちは、主に家・ムラ理論に基づき変動する農山漁村でのフィールドワークを通して実証的研究を行ってきたが、70 年代から生じた有機農業運動や有機農業の実践、農産物加工経営者・組織に関する研究の中から、90 年前後には個人への

着目が主張されるようになる。「哲学百姓」や農産加工販売組織と地域社会との関係を研究してきた徳野貞雄、山形県高畠町で有機農業運動の地域的展開を研究してきた青木辰司、松村和則らに始まる。

私もやや遅れて、90 年代半ば以降、フェミニズムの視点の導入と個人への着目を合わせて農家女性に焦点を当て、農村における個人・家・ムラの変動を捉えてきた。

その後、急激に進行する食と農のグローバル化とその影響下にある農山漁村の変動研究の中から、2000 年に入ると池上甲一らが 20 世紀の生産力主義パラダイムを超える新たなパラダイムの必要性を提唱、秋津元輝らが「消費される農村」をテーマに新たな理論の提示を行った。

また、2000 年以降、政策的次元から「限界集落」概念がマスメディアおよび中央官庁、地方自治体行政により突如注目を集め始め、限界集落を施策の対象とするさまざまな政策やそれに基づく事業が展開されていく。限界集落維持不要論、コンパクトシティ、農山村の集落統合や集落移転、グリーンツーリズムや都市農村交流、特産品開発、地産地消の推進、集落支援員制度など多岐にわたる。

村落研究者の間でも、集落再生、集落崩壊・消滅などの現状把握とそれへの政策的提言が研究者の間で強く意識されるようになってきた。

現場の農村では、とまどいつつもおおむね歓迎の方向で積極的、しかし中には拙速で事業導入を図り、その結果、グリーンツーリズム、都市－農村交流、農業の６次産業化や農村起業、U・I ターン者や新規就農者の受入れ制度など、農業・農村をめぐる新たな動きの中で「消費される農村」を作り出している。こうした状況に対しては、秋津元輝ら、徳野貞雄の批判的研究もある。本研究計画は、そうした秋津、徳野の流れに位置づけられることを企図している。

２．研究の目的

本研究の目的は、日本の村落研究における家・ムラ論をふまえての新たな方法論や研究枠組みを提示することにある。そのために、家・ムラ論および新たな方法論に関する理論的研究の動向をおさえると共に、都市―農村交流（農産物の生産加工販売、農家民宿・食堂など）を行っている複数のムラをフィールドに、ムラの住民、そこに関わる自治体・NPO・コンサルタント等関連諸機関、都市住民も調査対象に含め、インテンシブな調査を行う。

農村住民が持続的で安定した生活および農村社会の維持・再生をはかる方法の１つとして都市との交流を行う際、いかに「消費される」ことなく自立的でありえるかを明らかにすることを通して、家・ムラ論の有効性や限界、および新たな方法論・研究枠組みの提示を図り、実証的にも理論的にも寄与したい。

本研究は、実証的であると同時に理論の生成も目指すという点において、戦前から続く日本の村落研究の最も良質な特徴を持つ。激動の農村社会を研究対象とするからこそ、着実な実証研究が求められており、同時に新たな理論も切望されている。

そうした学問的要請に加え、現実の農山村への政策的提言という社会的要請にも本研究は十分に答えうるという確信を持つ。農村社会学、地域社会学、現代社会論などの領域における基礎的研究の進展に寄与すると共に、日本の農山村の今後を考えるための応用社会学的意味を持つと言えよう。

３．研究の方法

関連文献の収集・読み込みによる文献研究とフィールドワークを併用する。既存の村落

研究に関する理論の整理を行うことで、それぞれの有効性と限界や課題などを明確にする。有賀喜左衛門、中野卓らの家・ムラ論から徳野貞雄の生活農業論、青木らの個人への着目、熊谷苑子らのフェミニズム視点、池上、秋津の近年の主張などを取り上げる。

それと並行し、都市―農村交流を行ってきた農山村、農業者・レストランや旅館経営者・加工業者・マスメディア（雑誌、新聞、テレビなど）などの一時的なイベント、ネットワーク、組織などを対象とするフィールドワークを行う。

これらを通して、村落研究における新たな理論・枠組みの提示を行う。都市―農村交流（農産物の生産加工販売、農家民宿・食堂など）を行っている複数のムラをフィールドに、ムラの住民、そこに関わる自治体・NPO・コンサルタント等関連諸機関、都市住民も調査対象に含め、インテンシブな調査を実施する。

４．研究成果

本研究を通して、多くのムラを見てきた。メインのフィールドは岡山県高梁市備中町平川地区であったが、西日本の中山間地および韓国の農村も含め、比較を行った。韓国と日本の比較からは、相違点よりも共通点の方が多かった。韓国では、親環境農業（合鴨農法を含む）を軸に、農協、地方自治体、地域、地域内の諸集団・組織などとの連携が構築されつつあり、グローバル化への対抗戦略としての１つの処方箋となりえていた。日本でも同じようなことが進み始めている。

フィールドワークを通して明らかになったのは、「消費されない農村」が持つ、ある特徴であった。それぞれのムラは固有の歴史や文化を持つが、その中で形成されてきた生活意識（有賀喜左衛門）の影響を受けながら、ムラの主体性を形成・保有していた。

現代日本社会において、都市と農村は交流をぬきには相互に存立しえない状況がある。そうした中、ムラの側では、都市の欲望を十分に意識しつつもそれに振り回されるのではなく、リーダーや田舎のプロデューサー等、ムラのキーパーソンたちの判断で、交流を生み出し、続けていた。

その際の判断の準拠として、生活意識およびムラの主体性が存在していた。逆に言えば、生活意識およびムラの主体性が希薄化しているムラにおいては、たいへん容易に「消費される農村」となっていたのである。

また、研究当初はあまり意識していなかったことであるが、途中で気づいたこともあった。それは、農村側でどこまで「消費の対象」とするかを考えながら、交流を通して相互の「文化変容」を通した成果を積み上げているという事実であった。その結果、「消費されない農村」が可能となっていることを明らかにした。

最後に、今後の研究の方向性について述べておく。

都市―農村交流を通して、外部からムラへさまざまなものがもたらされる。「消費される農村」の、農村側の捉え返しはどうなっているか、見てきた。

そこで明らかになったことは、たとえば閉鎖的、保守的だった農村が、都市との交流によって、活性化する、視野が広がる、既存のものを違う視点から捉えなおしたり再評価したり、等であった。ムラ人たちには大きな成果であると認識、評価されていた。

そして、そこではムラの主体性がいかんなく発揮されており、結果としては失敗でもそこから何か教訓を掴み取り、生かしていくという姿勢も徹底していた。

他者への信頼、協力的態度の蓄積があるムラには、見識のある人たちが、たいてい一定

数存在していて、彼ら／彼女らは、与えられた土俵、既存の枠組みにそのまますぐには乗らない、はまらない、少しズラシて見ることをする。問題点の抽出と対策を立てる場合でも同様であった。

また、問題解決的な思考や志向は、やや息苦しいと感じる人たちが、一定数存在してもいる。なぜなら、生活というものは、何か問題があってそれを解決していく、というただそれだけではないと思っているから。のんびり暮らす、楽しく暮らすということに価値を置き、人々の社会的紐帯を作る・維持する・強める中で、ムラの個性や農村・地域文化の構築もはかっていくことをめざす。そうしたムラでのそこそこに充実した生活が大きな魅力を放っていた。

しかし、このまま同じ事を繰り返すだけでは、展望はない、やはり、若い人が入ってこないと、地域の再生産は不可能、という意見が出始めている。「今おる者で楽しく暮らしていく。それは分かる。でも、やっぱり、若者に期待し続けたい。人口増というのは無理でも、ちょぼちょぼでも若い人が入ってくる、戻ってくること。夫婦と子ども、そういう家族が少しはおらんと元気が出ん」と言うのだ。

では、都市－農村交流の次の手は何か。

ムラの中の個人個人は、それぞれに異なる思いを持っている。ただ、それらは色々な場で、ムラの意思のようなものに作り変えられていく。個人の思いが抑圧されるとか、無視されるというような単純なことではなく、何となくこういうことかなという方向での合意である。そこに住み続けながら何かを選んでいくということは、個人の意見を超えて人々の合意形成をはかるということだ。そうしてムラや地域で、物事が決まり、動いていく。

それぞれのムラの状況に応じて、まあ、そんな感じ、そんなもんでえかろう、と思えるあたりで合意を作るという、絶妙のバランスでムラは合意形成をはかりながら、農村外部からの臨時の助っ人や単なる労働力、准構成員、移住者や二地域居住者など、さまざまな人々とつながっていくことを模索していくのだと思う。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２件）

１．Rieko, TSURU, The Birth of a Producer in Rural Areas:　Their New Role in Maintaining and Rejuvenating Small Towns and Villages in Modern Japanese Rural Society; Lutgarda L. Tolentino, Leila D. Landicho,
Surichai Wun’Gaeo, and Koichi Ikegami ed.
ASIAN RURAL SOCIOLOGY Ⅳ “ The Multidimensionality of Echonomy, Energy and Environmental Crises and their Implications for Rural Livelihoods, 2011 Vol.2, P143-147、査読無。

２．Rieko, TSURU, An Analysis about the Subjectivity of the Active Mura; A Life Consciousness in Hirakawa-district, the town of Bicchu, Takahashi-city, Okayama pref. 吉備国際大学大学院社会学研究科編『吉備国際大学大学院社会学研究科論叢』第１４号、Ｐ107－130、査読無。

〔学会発表〕（計　３件）

１．Rieko, Tsuru, The Birth of a Producer in Rural Areas:　Their New Role in Maintaining and Rejuvenating Small Towns and Villages in Modern Japanese Rural Society, ARSA(Asian Rural Sociological Association) The 4th Conference, 2010/9/9 Legazpi City, Philippines

２．つる　理恵子、「食の問題構制」日本民俗学会第 62 回大会、自由報告、2010 年 10 月 3 日、仙台、東北大学

３．つる　理恵子、「ムラにおける女どうしの絆　―血縁＋地縁から選択縁へ―」日本民俗学会第 63 回大会、自由報告、2011 年 10 月 2 日、彦根、滋賀県立大学

４．つる　理恵子、「消費される農村とムラ

の主体性」日本村落研究学会第６０回大会、自由報告、鳥取県智頭町、2012 年 10 月 27 日

〔図書〕（計　１件）
つる　理恵子「有機農業運動と地域づくりフクシマ後も種をまく―」碓井崧・松宮朝編著『食と農のコミュニティ論　―地域活性化の戦略―』Ｐ43-57、創元社、2013

〔産業財産権〕
○出願状況（計　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
　つる　理恵子（TSURU RIEKO）
　吉備国際大学・社会科学部・准教授
　研究者番号：20227474

(2)研究分担者
　　（　　）

　研究者番号：

(3)連携研究者
　　（　　）

　研究者番号：